

## 第17回

書道監修・執筆 鍋島稲子

# 見る！そして感じよう！ ～書の鑑賞～

### 今回学ぶこと

江戸時代の人たちは、どのように書を学んだのでしょうか？ 掛け軸の意味と、掛け軸ができるまでの工程をみてみましょう。書の作品の保存方法や、修復方法について学びましょう。

学習前チェック！ 用語の意味を確認しておこう

江戸時代の書／いちかわべいあん市河米庵／せんじもん千字文／和様の書／おりでほん折手本／  
臨書／掛け軸／きれ裏打ち／裂／保存／修復

## 古典に学ぼう

東京国立博物館は明治時代に造られた日本最古の博物館で、日本と東洋を中心とした美術品や考古遺物、歴史資料など、貴重な文化財を10万点以上所蔵しています。今回は、江戸時代を例に、人々はどのように書を学んだのかをみていきましょう。

江戸時代は儒学の奨励に伴い、寺子屋では論語を勉強したり、千字文を書いたり、中国の古典を教科書として漢文の素養を身につけていました。書においては中国のみならず、日本の古典である和様の書も学んでいました。

書の学習方法は、書の古典をお手本にして、それをまねて書く「臨書」が基本です。江戸時代は、市河米庵など当時の書家たちが中国や日本の書の古典を数多く臨書し、楷書や行書、隸書など、さまざまな書体を体得していました。こうした書家たちの書いた書が、今度はその弟子や寺子屋の子どもたちのお手本となります。弟子や子どもたちは、当時の書家たちのお手本を臨書することで書を学んでいたのです。

お手本には、折手本という山折りと谷折りを交互に繰り返した蛇腹折り（アコーディオン折り）に書かれたものも使われていました。

### 今回の課題

書を学ぶ基本は？ 掛け軸の歴史と制作工程を知る。  
書の作品の保存や修復の大切さを知る。

## 掛軸の謎を探ろう

掛軸は、仏画を礼拝するためにつくられた中国の表装の形式です。もとは巻物から派生したもので、巻物を縦に見る形が掛軸になったといわれています。仏教の普及とともに、仏画の掛軸が広まりました。掛軸は、持ち運びに便利であり、また巻くことで作品の保護にもなるという利点があります。中国では時代を経るに従い、仏画以外にも風景画や書を鑑賞するために掛軸がつくられるようになりました。

日本で最初の掛軸は、飛鳥時代の仏画ですが、鎌倉時代になると、禅宗の移入とともに中国の禅僧によって掛軸がもたらされ、水墨画や墨跡などの掛軸が発達します。以後、日本独自の様式で掛軸がつくられ、和歌や手紙などを茶室に掛け、絵画や書を床の間に飾るようになりました。

### ■掛軸ができるまで

まず、裏打ちをします。裏打ちとは、作品の裏面に糊で紙を貼り、補強することです。最初に行う裏打ちを肌裏打ちといいます。作品にシワがでないよう、また作品を傷めないように、糊のついた裏打ち紙を本紙の裏面に丁寧に付着させます。

次に、表具に使う裂（紙や布）を作品の雰囲気に合わせて選び、裁断します。この裂にも裏打ちを施します。裂の変形を防ぐためです。

肌裏打ちをした本紙を、裂との厚みや腰の強さなどのバランスを整えるために、再び裏打ち（増裏打ち）をし、仮張りをして乾燥させます。

裏打ちした本紙と裂を、裁断しながら切り継ぎ、掛軸の形をつくっていきます。

本紙と裂が一体化したら、この状態でさらに裏打ちをします。これを総裏打ちといいます。作品全体を引き締め、定着させるために、総裏打ちをした作品を仮張りして、長時間乾燥させます。

乾燥後、掛軸の仕上がりを柔軟にするために、数珠で裏面を摺ります。

最後に、軸木や八双、風帯、紐などを付けて完成です。

## 書を修復する

文化財を守り、伝えていくためには、適切な環境のもとで作品を保存することが第一です。それは、温度や湿度を一定に保つことや、害虫から守ること、光を最小限に抑えることなど、日々の努力が大切なのです。しかし、それでも長い年月の間に作品が傷んでしまうことがあります。

その場合、修復を行うことになります。

修復とは、資料を新品のようにきれいに復元することでもなく、強度を増すことでもありません。できるだけ当初の姿をとどめるよう最大限の努力をしながら、次世代に伝えていくことが修復の使命なのです。

例えば貴重な本の場合、虫食いや折れた部分のみを一か所ずつ細かく補修するという、気の遠くなるような作業を行っていきます。また、書の作品の場合、文字の部分が欠損してしまっても、あらたに文字を書き込むようなことはしません。オリジナルにないものは加えない、というのが修復の基本理念だからです。



### 達人からひと言！

作品を書くとき、できるだけ「かっこいい字」を書きたいと誰しもが思うでしょう。それにはまず、「かっこいい字」の表現の蓄えが必要になります。その蓄えが多ければ多いほど、表現の幅も広がるからです。では、どのように蓄えを増やしていけばよいのでしょうか。それは、書の古典を数多く見ること、そしてそれを臨書することです。多くの書の古典を見ているうちに、自分が理想とする字に出会い、それを幾度となく臨書しているうちに、自身の血や肉となっていきます。書の古典を鑑賞する「目習い」、そして臨書する「手習い」、これが書を学ぶ基本です。先人の残した書をじっくり観察し、そしてそれを何度かまねて書いてみてください。自分の名前を、書の古典から探して学んでみるのも一つの方法です。いつか「かっこいい字」で自分の名前が書けるようになるかもしれませんよ。



達人  
鍋島稲子